

# 大陸（北支）

## 河南作戦 洛陽攻略

### 歩兵第十連隊第三大隊

岡山県 今 吉里 治

我が歩兵第十連隊史上輝かしい一ページを記録することになった「河南作戦」の総攻撃は、昭和十九年（一九四四）年四月十九日午前六時四十分と決まった。四月十九日、夜は静かに白みはじめ。我が将兵は皆無言のまま鉄兜をかぶり紐をしめ、装備の点検をはじめめる。

午前六時、総攻撃まであと四十分はある。コチコチと時を刻む腕時計の音がいやに大きく聞こえる。皆緊

張し神経が鋭くとがる。それは運命を刻む音にも聞こえた。お互いに見苦しい死に方だけはしたくない。いつも冗談を言う戦友達もこの日だけは神妙である。ついに来る時が来た。前線に向かう将兵の覚悟は感無量である。ただ、ただ無言……。覚悟を決めた戦友達は無表情である。

昭和十九年四月十九日午前六時四十分、霸王城の台上に大小合わせて二百門の砲列が敷かれた。野戦重砲兵第六連隊（村上支隊）十五榴の砲撃で開戦の火蓋は切って落された。続いて佐賀軍砲兵、師団野砲、連隊砲、大隊砲、迫撃砲など大小合わせて二百門の砲が一斉に火を吹いた。「ダー！ ダー！ ダー！」まるで地震の様相だ。耳をつんざく砲弾の炸裂音、砂塵がもうもうとして何も見えない、何も聞こえない。ただ地

鳴りだけ、凄惨はその極に達し、黄土高原の山容は変形した。地球の最期を思わせる砲撃は二十分間続いて、七時でびたりと止まった。

それを合図に重機の支援と発煙弾に膚接して、歩兵第十連隊第三大隊（天野大隊）、第九中隊（中野隊）、第十二中隊（三田池隊）を先頭に、師団のトッブを切つて「ハト」の陣地に突っ込んだ。軍刀を振りかざす中隊長は十文字の白だすき、小隊長は右肩から一本、分隊長は左腕に白の腕章をつけ、決死の勇で突っ込んだ。

第九中隊は前夜陰に乗じて敵の鉄条網の線まで潜入していた。中隊長は軍刀で鉄条網を切り、縄ばしごを使って断崖絶壁をよじ登る。壕の敵を追つて台上に上がり、歩み板を渡して地隙を越える。台上は起伏に富んでいるが案外広く、ビルからビルを飛ぶような所もある。一つ間違えば、百メートル、二百メートルの谷へ落ちる。敵も必死の応戦を繰り返す。各所で白兵戦が展開され混戦状態となる。

攻撃開始以来すでに一時間、勝負はついたが友軍の犠牲者も多く、「ハト」の敵陣地の手前の谷で彼我の砲弾と敵の地雷にかかり木っ端みじんに砕けた鉄帽、雑のう、水筒等がむなしく転がり、肉の破片が散り、影形のない無残な戦友の姿を見て通つた。無我夢中で敵の「ハト」の陣地を、その日の十一時十分に制圧した。

二十七陣地には林芳太郎第十師団長、その前に黒須源之助第十連隊長、右翼支隊に第六十三連隊長（上坂大佐）、左翼支隊に百三十九連隊長（下枝大佐）がじつと戦況を見守る。さらに後方桃花峪には、第十二軍司令官内山中将、左翼には第六十二師団長（本郷中将）、中牟を攻略した第三十七師団が鄭州を攻略し、京漢線に沿つて南下、新鄭から許昌方面をうかがつていた。

第十連隊は第三大隊が右翼隊となり「ハト」の陣地を突破し、第一大隊（潮隊）が右翼隊となり「モリ」の陣地を攻撃した。第二大隊（築村隊）は後備部隊となった。第二大隊の將兵達もまるでパノラマのよ

う展開されている戦闘を台上から見守っていた。

十一時十分、第一百連隊は「ハト」の陣地の制圧を見た。林芳太郎師団長は、第三百十九連隊（下枝大佐）に、密県攻略の挺進隊を命じた。第六十三連隊は摩旗頂重砲陣地、漢王台地の頑強な敵に苦戦していたが、夜間攻撃で二十日午前三時、これを制圧した。

蒋介石は霸王城の陣地は陥落するものと思ひ、第一戦区第三十一集團軍の第十三隸下の百十師団一個師で防衛していたが、最小の犠牲で早く逃げた。第二線は、密県―登封の線の陣を構えて決戦を企図していた。洛陽東の守りは汜水鞏県の線で備えていた。

第一百連隊は破竹の勢いで枯川を渡り、広武県河陰城の西を通り、二十日、栄陽に向かって前進した。二十一日未明、第九中隊は栄城を攻撃したが友軍の砲兵隊に敵と間違えられ攻撃を受けたので、いったん下り各中隊の出揃いのを待った。そこで後尾にいた第二大隊が前衛部隊となり、逃げる敵を追撃し、蘇岩、曹季岩を陥り、栄陽に迫り、第二大隊が中央となり、第一大隊が左第一線、第三大隊が右第一線に展開しジリジ

リ攻めあげ、第二の拠点である栄陽を十五時に占領した。

四月二十一日、師団情報によれば、密県北方の山地一帯に有力なる重慶軍が既設陣地に拠り、また、有力な部隊はそれぞれ塔山、崔廟、石磬溝付近の陣地に進出しており、その兵力は少なくとも一個師団と推定され、師団命令により第一百連隊は崔廟、第三百十九連隊は石磬溝、第六十三連隊は塔山に攻撃が命ぜられた。栄陽―密県街道には敵の死体が数多く横たわっていた。挺進隊攻撃の壮絶さがうかがわれた。この頃、携帯口糧のうち甲（米）二日分は既に食べつくして、乙（乾パン）二日分だけとなった。行けども行けども山また山で、伏牛山脈は深くいつ果てるとも知れず。歩兵の快進撃には行李はついて来られず心細い限りだった。乾パンをお粥にし飢餓をしのいだ。

四月二十二日、崔廟（道祖神）では思わぬ敵の猛反撃に遭い、我が第三大隊本部は廟の上で孤立し危機に

ひんした。各中隊は前進し、バラバラで連絡がとれない。麦の穂で頭を偽装した敵が、匍匐前進で大隊本部のいる娘々廟まで二百メートルまでに迫って来た。我が装備は大隊砲一門、重機関銃一丁、軽機二、擲弾筒一筒、それに歩兵、大隊長以下指揮班三十余人、心細い限りである。私も三八式歩兵銃で三、四十発は撃った。娘々廟の塀を楯に撃ちまくった。敵は二百メートルと近づけなかった。

前線の中隊も苦戦を強いられていた。南方への転戦で数少ない友軍の飛行機が救援に駆けつけて、急降下爆撃と機銃掃射で、敵は第三陣嵩山、中岳廟方面に向かって退却した。第三大隊は密県北方の五八二高地を攻略した。この陣地は蒋介石が自ら構築した自慢の陣地で堅固だった。栄陽、密県、登封、臨汝、鞏県は洛陽の守りの要で、戦略的要衝だった。

四月二十三日、五八二高地を攻めた第三大隊（天野隊）は牛店目指して進撃し崔廟の危機を救ってくれた。飛行機はハイラルにいた第五航空軍二個中隊の二十四機だった。第一大隊、第二大隊は密県をうかがっ

ていたが、密県には、二十三日十三時十分、第三十七師団歩兵第二百二十五連隊の密県挺進隊が入城していた。第一百師団密県挺進隊は、第三百十九連隊が当たり、二十二日、石磬溝を攻略し、二十三日に五八二高地占領後、二十四日には密県に突入し、歩兵第二百二十五連隊と警備を交代した。歩兵第三百十九連隊は密県ではかなりの戦果をあげたようだった。

歩兵第一百連隊第三中隊が五八二高地から牛店へと進撃している間に、第一大隊と第二大隊は密県の敵を敗走させ、ここで弾薬、糧秣の補給を受け、第一大隊は馬明寺、第二大隊は告成へと直行した。第三大隊は、嵩山中岳廟の要衝牛店には四月二十九日に到着した。牛店の部落は大きな平地にあって、一個大隊が夜営しても空家が多く残るほどで、町並みもよく、油の穿油工場もあり、三年続きの河南の干ばつに遭っても余力があるようにうかがわれた。

大隊本部は街の中央に位置した。その翌日四月三十日、直撃砲を持ったかなり有力な敵が攻撃をしかけて

きたが大したこともなく平静に戻り、牛店部落で糧秣の補給を受け被服も補修した。牛店は有名な漢王廟のある所で、第二大隊が占領した告成は有名な天文台のある所である。

我が第三大隊（天野部隊）は五月一日、第一百連隊の指揮を離れて、野戦重砲兵第六連隊（村上支隊）の配属となり、その援護を命じられ嵩山中岳廟の攻撃に向かった。霸王城の「ハト」の陣地を突破のとき「ドカンドカン」と巨弾を撃ち込み河南の空を震わせた連隊である。「あれを見い、大きな砲じゃのう、砲弾もわしら一人では持てんぞ」。第三大隊の将兵達は野戦重砲の大きいのに今更ながら驚いた。とにかく一門の砲を六頭立ての馬が引いて進むのだから、山の中を進むわけにはいかない。砲兵は重い砲弾を一つずつ担いで運んでいた。約八十七センチの長い弾に火薬を九リットル詰めて「ドカンドカン」撃つ瞬発である。「ヒューヒュー スルスル ズドン！」と炸裂する。その破片で大木も折れてしまう。それが大隊本部の前で炸裂するのである。

五月三日、中岳廟東方十キロの盧店に入った。ここで待ち受けていた敵の迫撃砲も機関銃の十字砲火を浴び苦戦した。天野大隊は野重第六連隊の援護を兼ね、中岳廟の山林の中を進んだ。林の中で敵味方の区別がよく分からない野重の観測が悪く、第三大隊の前で炸裂する。「ヒューヒュー シューシュー ズドン」と大木がバリバリ折れる壮絶さである。

隊長もややびっくりしたのか、着剣している私の三八式歩兵銃を「貸せ！」と言われる。銃剣を大地にドッと突いて、落ち着いたようだ。湯恩伯主力第十三軍と第二十九軍は登封を中心に、南は大雄山、北は嵩山三十六峯にかけて防備を固めていた。中岳廟は道教のメッカ、少林寺は禅宗のメッカであり、かなりの兵が駐屯していて廟の壁に銃眼を作り頑強に抵抗した。我が大隊の第十一中隊と第十中隊が銃眼攻撃を行った。連隊主力が登封を攻撃する前に、是が非でも中岳廟の敵を攻撃しなければならない。

第三大隊（天野隊）本部と第九中隊は中岳廟東部の山を占領した。あわてた敵は迫撃砲を「つるべ撃ち」

にしてきた。弾着の修正もよく、我々がいる山頂の直ぐ前で炸裂する。我々は岩陰に身を伏せたまま身動きも出来ない。「ヒューヒュー ヒュルヒュル ブルンブルン」と頭上で音が止まった。落下と同時に炸裂する。もう生きた気持ちはない、ただ祈るだけである。運を天に委ね、運天と度胸をきめた。しかし山の斜面にいたためだろうか、犠牲はほとんど出なかった。野重に敵の迫撃砲陣地の破壊を依頼したが梨のつぶで、いっこうに音さが無い。この日は皆、山頂で一夜を明かした。

無線で連隊本部に連絡してみると、腹背に我が軍の攻撃を受けた湯恩伯主力は退却した。敵の万以上の大軍は、我が軍の包囲網から脱却しようと伏牛山脈に向かって退却した。

五月一日、我が天野大隊は嵩山中岳廟を攻撃中、敵、新編第三十五師および第三百三師の司令部指揮中枢に、馬を使わず隠密で深く進入、敵第十三軍の洛陽への合流を阻止し、野戦重砲兵第六連隊と我が大隊は、

敵の中岳廟嵩山を楯にトーチカを攻撃し浮足立っていた。た。

湯恩伯主力の退却を見てとった我が天野大隊長は、「時は今だ！」と突撃の命令を下した。「ウワァー！」と將兵は一気に黄蓋峰から中岳廟の境内に突っ込んだ。まさに「ひよどり越え」の逆さ落としである。我々は黄蓋峰から中岳廟の山門まで着剣して、まっしぐら、怒とうの進撃、というより突撃である。逃げ遅れて捕虜にした者、草むらに身を伏せていた者もかなりいた。ついに中岳廟の陥落である。

その時、山門の楼上から「笛」と「笙」の音が聞こえてくる。それは、今でも私の耳の奥深く残っている。

「一の谷の平家落城」を思わせた。これは道士封禅の「雅楽」だったのであろうか。中岳廟ならびに少林寺の攻撃に際して、方面軍司令部より「文化財の保護」を命令されていたので、その配慮に努め、中側要人ならびに寺側から感謝の意がよせられたのである。

中岳廟の戦いは五月四、五日の二日間で攻略した。天野大隊はそのまま登封に向かつて前進した。大隊は、二、三日、登封付近で過ごした。部隊は部落に入るとすぐ宿舍の準備にかかった。野砲第六連隊は、約一時間遅れて部落に入ってきた。普通なら天野大隊は野重の指揮下（村上部隊）に入っているのので、先に着いても野重の到着を待たねばならない。ところが、天野大隊長は勝手に宿営を命じ、野重が到着しても知らん顔をしていた。兵隊はお陰で喜んだ。休むのは早いほど良い。

宿営準備が完全に終わった頃、野重の曹長が馬に乗って第三大隊（天野隊）の前に来た。「天野大隊はなぜ連隊本部より先に宿営した。なぜ連隊本部の指示に従わない」と下士官をつかまえて盛んに文句を言っている。これを聞いた天野大隊長は、馬に乗ったまま曹長の前に出ると「兵は疲れている、十分でも二十分でも早く休ませねば次の戦闘が出来ぬ。いつ来るか分からない連隊本部など待っておれん」と一喝した。曹長は一言の文句も言えず不満そうな顔をして帰った

が、第三大隊はその翌日から野重の配属を解かれ、古巢の第一百連隊に復帰したのである。それに代わり、第二大隊はここで師団の直轄となり、騎兵第四旅団（帝國陸軍最後の騎兵と言われた）に配属された。

野重の配属を解かれた天野大隊は、五月十一日に呂店に到着、戦車第三師団の配属となり、洛召公路をひたすりに洛陽へ洛陽へと急いだ。我々は広い河南の平野を、火野葦平の「麦と兵隊」の歌「行けど進めど麦また麦」を口ずさみながら行軍したのである。

当時の我々將兵は、洛陽攻撃を行うため前進（行軍）していると思っていた。何日かの長い行軍の後、第三大隊（天野隊）は、洛陽南方数キロの地点に着いた。遠くから眺める洛陽は、大きな樹木に覆われる林の中に町があるごとく思われた。町並みも古く、中国特有の城壁はなく、そのかわり深い濠で周囲が包まれている静かな町で、とても戦争が起きているとは考えられぬ静けさである。霧に覆われた洛陽の町を右に眺めながら、洛陽には突入せず、軍の命令が変更にな

なったようである。我が部隊は洛河を渡り、対岸の部落で宿営したのは五月十二日であった。

五月十三日朝、部隊は隊列を整え西へ向かって出発した。「今日は戦車と一緒に敵に遭っても案だ」天野大隊長の言葉通り、部隊の後方からトラック十数台を交えた戦車が四、五十台やって来た。給油車・弾薬車・オートバイを交えた団列は三、四キロメートルは続く。ちなみに戦車一個師団の戦力は二十トン車約二百車両分である。戦車は全部えん蓋を開け、戦車兵が上半身を出し、砂塵を上げながら進んで行く姿は勇ましいかぎりである。しかし、戦車隊との行軍はこの一日限りで、翌日は盧店・水砦・南営・尋村と、洛河の鉄舟橋を渡河した。

連隊本部第一大隊と共に洛潼公路を前進する予定であった我が第三大隊（天野隊）は「尋村の西から賈園に向かって進べし」という命令を受け、単独で公路の北の山中の行軍に移った。

この日、戦車を攻撃する目的で、敵戦闘機P40四機とB24爆撃機が数機、低空二百メートルから機銃掃射

を加えて来た。うち一機を機関銃を含む一斉射撃で撃したのを聞いた。スピードにもよるが、低空飛行の襲撃に対して機銃攻撃は有効であることが分かった。

ここから西安に通じる道は二本ある。天野隊は相変わらず山の中を行軍していたが、段村の背後の山あたりから地形が変わってきた。朝から続くシヨボ降り雨で、将兵は冗談を言う元気も無く、黙々と行軍を続ける。

このあたりは全部黄土で粒子が非常に細かく、ヌルヌルである。坂道では軍靴の紐が切れて大変な事になった。私は背のうからシャツを取り出し足に巻いて歩いた。大変なのは馬である。大隊砲を引く張ったり、数人で車輪を回したり、また、後ろから押したりして前進した。

この日も朝から何回も小休止があつたが、人家もなく雨の中で、下はぬかって腰を下ろす所もない。背のうを背負ったまま立っていたので疲労は増すばかりである。皆、草の生えている所や石や木切れなど泥のつかない所を探して腰を下ろしたが、しまいにはやけく



そで小休止の声を聞くと、そのままゴロリと横になって休んだ。雨は容赦なく降り続く。五月中旬が過ぎたというのに雨は冷たく重い。気温は三月上旬並みの四、五度まで下がった。雨は豪雨となり、降雨量は一二〇ミリに達し洛河ははんらんした。飢餓と寒さがこもごも来たり、兵は疲労困ぱいの極に達し、どの戦友も唇が紫色に朽ち果てて生気を失っている。まさに『討匪行』の歌詞通りである。

「どこまで続くぬかるみぞ 三日二夜を食もなく

雨降りしづく鉄かぶと……

既に煙草はなくなりぬ 頼むマッチもぬれはてぬ  
飢えせまる夜の寒さかな」

天野大隊長も早く兵を休ませるため部落を探したが、行けども行けども部落は無い。雨の中では露営もできず、ついに一日中歩き続けた。やっと民家がまばらにある所を見付けた。一時は雷鳴をとまなり豪雨となり、雨で無線は通じなくなり、天野大隊は行方不明となっていた。

豪雨の中、人馬濡れ果て、泥濘膝を沈する難行、兵

は黙して語らず。やっと目的地賈園の部落を探し当てる。賈園は谷底の部落で、洞窟の中で家具を壊し暖をとり服を乾かす。日はだんだんと暮れてゆく。左側段村付近では激しい砲声と重機関銃の音が聞こえる。台上に天野大隊長は天幕を張り、連隊本部との無線交信をしたが、雨で連絡がとれず、段村方面の銃声はますます激しく、大隊長は連隊本部の救援に向かう。佐藤副官は直ちに兵を整え、出動態勢をとれと命令したが、兵隊全員が素裸でどうにもならず。天野大隊長が上州弁で「俺っちが行く」と言って大隊本部指揮班のみを連れて南へ向けて出発したが、真つ暗の夜道で道が分からず、しばらくして引き返して来た。

五月十五日早朝、雨の上がった賈園で隊列を整え、段村の東北方高地竜王廟に進出した。第一百連隊史上最大の「悲劇の戦闘」となった段村へ、連隊本部と第一大隊、それに戦車第三師団が洛潼公路西進、段村の正面に迫った。雨中行進は大変疲れる。黄土のぬかるみに軍靴がすっかり食い付いて離れない。一緒に行軍

していた戦車でさえも無限軌道はぬかついて、ついに立ち往生してしまった。雨にうたれて黙々と歩く将兵達の目に白草波の部落がうつって来た。

「おお！ 着いたぞ」。やっと着いたか、兵の顔は血色を失い、唇は紫色に朽ち人相が変わっていたが、ほほ笑みがよみがえり、自然と足並みも早くなる。その時、白草波の部落から「弾」の雨が降り出したのである。尖兵中隊となっていた第一中隊の河原太郎兵長が「敵だあ！」と叫びながら泥沼の中に身を投げ出した。軍服も顔も泥にまみれた河原兵長は部下を掌握しようとして、あたりを見回したが、まるで、田んぼに潜ったドジョウのように見分けがつかない。

敵の攻撃は激しくなるばかり、潮大隊長も白草波への突入をあきらめ段村へ部隊を迂回させた。段村には、第一戦区长官蔣鼎文と陳誠が洛陽の救援に来ていた。前面の敵は霸王城突破の時、前方に立ちはだかった第三十一集団第十三軍隷下敵百十師の精鋭であった。その兵力は約一万と推定されていた。

五月九日、第一軍の隴海線遮断の靈宝作戦に続い

て、五月十日の第三十七師団の伊陽嵩県、第六十二師団の伊河河峪洛河左岸の進出に対して洛陽会戦を予期していた。第一戦区蔣鼎文長官はこのよう撃作戦を察知し総退却を命じ、宜陽、段村に堅固な陣地を構築し、後衛尖兵の役割を果たすべく、コンクリートで銃眼を作り、銃座の兵は鎖で足を縛り決死隊とした。そして、我が軍を待ち構え、ドイツ式マキシム水冷重機関銃が十字砲火を浴びせてきたのである。飢えと寒さの強行軍のため兵は疲労困ぱいの極に達し、戦闘の気力を失い、泥田の中に頭を突っ込んだまま倒れる者三十数人に達した。

第一大隊の潮大隊長は、第一中隊に敵の正面を突くよう命じた。援護は重機一機と大隊砲一門だけであった。第一中隊長吉岡中尉はすでに死を覚悟し、悲壮な訓示を部下に与え、敵の正面に部下を散開させ、ぬかるみの中をジリジリと将兵は前進を始めた。敵の攻撃は一段と激しさを増してきた。敵の迫撃砲弾は泥田の中では突きささったまま爆発せず、全く役にたたなかった。

第一中隊は、一メートル、二メートルと匍匐したまま外側の戦車壕あたりまで前進すると、アンペラで隠してあった敵の重機が一斉に火を吹き出した。最後の手段、「突っ込め！」と吉岡中尉の白刃が光った。将兵は一斉に立ち上がるが腰まで埋まった泥沼ではやっとなへ進むだけ、吉岡中尉、佐藤准尉、石井兵長も続いたが、壮烈な戦死を遂げた。

第一大隊は段村の攻撃が意のままにならず、一応兵を下げ、第三大隊の北部高地からの救援を待った。潮大隊長は歯ぎしりをして泣いたと聞いている。第一中隊は後ろに下げられ、代わって第四中隊が正面になったという。

我が第三大隊は、早朝、連隊本部の命により段村東北方の竜王廟の高地を確保した時を待っていた、とばかり西方白草波の敵陣地から機関砲の攻撃を受けた。まさか敵が機関砲を持っているとは思ってもよらず、戦車第三師団の戦車砲の誤射と思ひ発煙筒の信号弾を撃ち上げた。すると、すぐ敵の迫撃砲が、雨あられのごとく落下しだした。大変な事態である。すぐに台上に

重機、大隊砲を並べて応戦しようとしたが、連日の雨で、大隊砲の弾を込めても、火薬が湿り使いものにならない。竜王廟の高地を占領した我が有利な態勢にある時、敵の迫撃砲が炸裂し、大隊副官佐藤少尉以下十人ほどの死傷者を出した。

白草波の敵を排除し、第三大隊の尖兵は段村北西方の背後の山にとりついた。足下に第一大隊を悩ましている敵陣を臨みながら戦列を整えていると、突然敵は機関砲を撃ち込んできた。「ダン！ダン！ダン！」と、けたたましい音と共に真つ赤な曳光弾が無数に尾を引いて機関銃と迫撃砲がうなる。河南の朝は修羅場と化した。双眼鏡で敵の動静を見ていた天野大隊長は「中野中尉はおらんか！」とどなった。

第九中隊長中野良戒がすぐ駆けつける。「おお中野！だれでもよいから兵二、三人を連れてあの山を確保しろ」と早口で命令する。後に第九中隊の石原上等兵から教えてもらったのだが、もし、あの山を占領されていたら、段村の第一大隊も、白草波の第三大隊も苦戦を強いられ、戦局の行方も不明であった。敵に

とっても重要な拠点であったのに占領しなかったのは、敵に余裕がなく、逃げるのが精いっぱいであったのかもしれない。敵は分哨すら置いていなかった。第三大隊が見守る中を中野中尉が兵三、四人を連れて先を争うように登って行く。このうちにも稜線で対峙している将兵の中には敵弾に倒れる者が数を増した。

同時期、連隊通信中隊の下士官以下五人全員が泥にまみれ第三大隊本部に電話架設を行う。後に黒須連隊長より、天野大隊長に対して直ちに一個中隊を連隊本部に差し出し軍旗を守護すべしとの命令を受け、第十一中隊（矢吹中隊）に軍旗守護を命じ、連隊本部に急行させた。

その頃、第一大隊も攻撃を開始していた。第四中隊の衣川隊が正面になり、同隊の第三小隊長代理有元曹長も部下を集め「よいか、我々は決死隊だ、見苦しい死に方はするな」と訓示し、とっておきの羊羹やまかんを一切れずつ配って別れを告げた。この日も、昨日同様に熾烈な戦闘だったが、敵の背後に我が第三大隊から攻撃を受け、腹背に敵を受けていたため戦局は徐々に変化

しはじめた。

「死を覚悟した兵隊ほど強いものはない」。昨日不覚をとった敵の銃眼は今日の一歩の攻撃目標となった。冷静に敵の動きがよく見えてきたのである。

支援の野戦重砲兵第三大隊の十五センチ榴弾砲が一斉に火をふいた。黒煙もうもうとして段村を蓋う。雨にぬかって進撃が遅れていた戦車隊が到着し、歩・砲・戦車の連携で、十五時砲撃を再開、敵の銃眼攻撃を行う。段村の敵も洛寧方面に向かって退去を始めた。背後の山にいた第三大隊が機銃で掃射する。敵の後衛尖兵、段村の堅陣もついに陥落した。敵第一戦区长官蔣鼎文は狭撃包囲撃滅作戦を察知し、総退却を命じた。

かくて、黒須連隊長・潮大隊長・天野第三大隊長は段村で感激の握手を交わしたが、友軍の損害があまりにも大きかったため、黒須連隊長は林師団長に戦況を報告したらずぐに返事が来た。

「少しくらいの損害でよくよするな。退却し敵を

追って長水鎮の隘路口に捕捉せん滅のため進撃すべし」と。軍の命令は無情、苛酷であった。將兵は休む間もなく進撃のため段村を出発した。

五月十七日出発、第三大隊畑指揮班長は敵の歩哨らしき者を発見、天野大隊長に「敵発見」を報告す。十四時頃、第三大隊本部正面に大部隊の敵影を発見すると、発砲してくる様子もなく相對峙す。各中隊に至急本部の位置に集結するよう無線で連絡するも、各中隊とも正面の多数の敵と交戦中で、これを放置して本部位置に集結は不可能で、今しばらく集結を待つよう要請あり。

天野大隊長は、本部正面の敵発砲なきは、敵に戦意なく、降伏の機をうかがっているものと察知し、密偵および通訳一人を軍使として派遣し「一時間後に降伏するよう」申し入れる。十五時に至るも降伏の様子もなく、天野大隊長は大隊本部の突撃を決意し、突撃命令を下す。本部指揮班長は、本部伝令全員を指揮し、天野大隊長と共に突撃を敢行す。

突然、第九中隊（中野隊）から伝令が来て、敵の一個連隊を捕虜にしているから、大隊本部にすぐ来てくれとのこと、大隊長が急行してみると、敵は大休止をしていた。このようにして敵の降伏する者も多く、護送中に逃げた者もあり、第三大隊では司令官をはじめ約千人の捕虜を得た。

軍は五月二十四日十三時、攻撃を開始し、この日の朝、投降勸告文を空中投下し、放送を使用し回答を求めたがその回答はなかった。

軍司令官内山中將は、その勸告文の中に「洛陽にある重慶軍は無益な抵抗をやめ、特にその史蹟を戦火より救うべく」と例証をあげて説いたのである。

二十五日八時三十分、ついに洛陽を完全に占領攻略したのである。

その間、部隊は長水鎮からさらに西、西安方面に向かって進んだ。このあたりから山また山の行軍が続いた。二、三日過ぎた頃、我が部隊の黒須連隊長は、連隊全員を集合せ隊列を整え訓示を行った。「河南作戦は終了した。この度の第百十連隊のめざましい活躍

に対してかしくも大元帥陛下からご嘉賞をいただいた。将兵は感激にひたった。

思えば霸王城を突破以来すでに三カ月を経過し、多くの戦友を失った河南作戦はついに終わったのだ。ご嘉賞もさることながら、将兵達は生き残ったという喜びもまたひとしおであった。

## 晋察冀辺区作戦記

愛知県 小澤 准 平

昭和十六（一九四一）年八月八日、駐蒙軍下第二十六師団管下歩兵第十二連隊にて、一期教育を終了し、第一年度下士官候補教育隊として連隊本部通信所で教育勤務をしていた時、方面軍作戦として晋察冀辺区共産軍の徹底撲滅を期した作戦命令が我が中隊に伝達される。初めてのことなので勇躍して待機した。出動は十日未明という。出発に先立ち弾薬一人一二〇発、米三分、乾パン二日分、若干の着替えの衣料、靴下な

どが支給され、それに靴の悪い程度を檢了し、準備万端終えて出発を待つ。

蒙古の夏はまたひとしお厳しい。出動の十日は明けの三時、戦友の田口、鈴木と飯上げに行く。電信所は例により別分配で、三人で持ち帰り、電信所員十八人で最後の連隊内の食事をする。返納するバックを若干の居残り者に依頼す。五時過ぎ、戦友の待つ中隊に急ぐ。野田班長がもう、あのひげ、頭髪を落して清々と立っている。土屋兵長の引率で野田班長に敬礼す。中隊兵舎では、はやくも当指揮官大西健吾中尉が軍装に身を固めて佐藤修准尉と話し合っている。

通信隊長は本作戦間は連隊副官として軍の指揮に当たるため、大西中尉が代理通信隊長になる。駄馬隊は二日前出発したので今日は自動車で目的地まで行く。工程は一日、本部前にはすでに山下部隊の自動車（トラック）が幾十台か列んでいる。

五号機四個、師団通信一個分隊と指揮班、技術員と総員約一〇〇人、通信隊総出陣である。やがて整列を終え、五分前に中隊長代理大西中尉より、「当作戦中